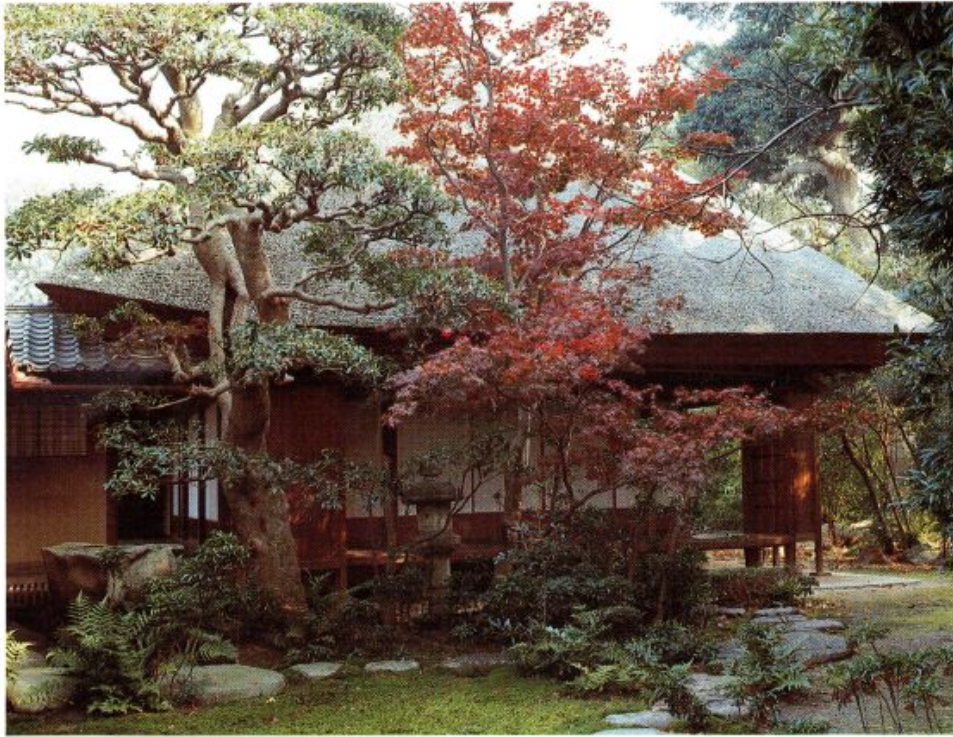


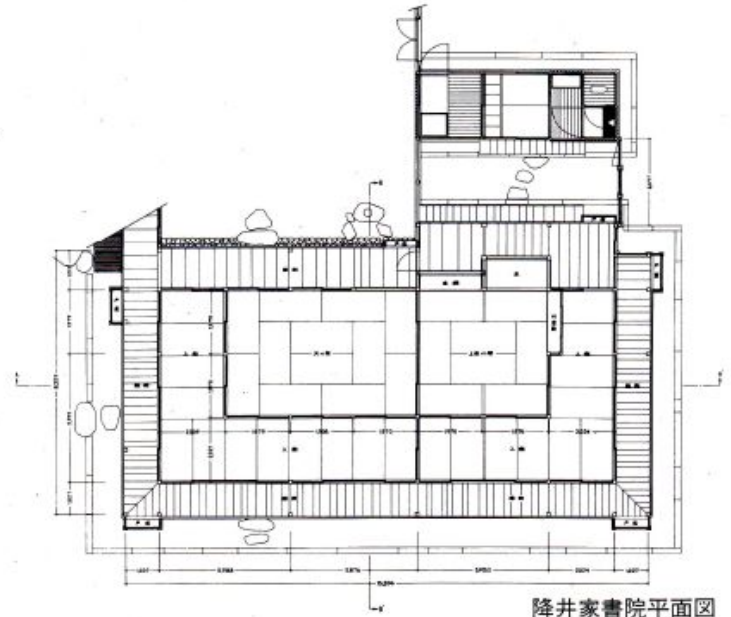
民 家

国指定重要文化財

降井家書院



熊取町教育委員会



降井家書院平面図

構造形式

桁行15.894m、梁間8.209m背面北寄りに桁行5.976m、梁間0.8m、縁側張出し、上段の間、次の間、入側、縁等より成る。一重、寄棟造、茅葺、棟本瓦葺、背面棧瓦葺庇付き、なお、西側南寄りに主屋へ連続する渡り廊下（指定外建物）が接続する。

修理の概要

期間 昭和52年1月1日～昭和53年3月31日

総工費 37,451,098円

主な修理対象

- 屋根の葺替（海ヨシにてトラック10台分）
- 北側の地盤のゆるみにより傾斜した部分の改修
- 壁画、襖の修理
- 床の間の北側の風呂と便所の切り離し。など

降井家は、中家と共に当地方の豪族であったと伝えられ、当家所蔵の天保6年作成屋鋪図によれば、2500余坪の敷地に台所、広間、書院、土蔵、^{うまや}厩等膨大な邸宅を構え、射場、馬場まで備えていた。台所、広間等は縮小したものに建替えられ、書院も元広間に接続していたようであるが、広間と切放して今の所に移された。その他の建物では、後に出来た表門と^{ちんじゆ}鎮守を残すのみである。書院は江戸時代初期頃の建立にかかるものと認められ、その後、柱、縁廻り等相当大きな修理をうけている。



小笠原諸島の開発を計画した天文学者の盛彬

建物は8帖の上段の間と12帖の次の間で、その三方に畳敷の入側があつて、更にその外側と背面に縁側がある。この内、上段の間は、最もよく残っている。上段の間は8帖で、床、棚、書院を備え、次の間との境に、彫抜欄間をはめ、^{うちのりなげし}内法長押、天井長押を設け、次の間は12帖で面皮柱を用い、入側との間の鴨居上の窓を竹格子とするなど、数寄屋風を多分に加味した書院造りである。

また、上段の間の床、違棚の張付絵、間仕切襖及び障子等も当初のものと認められるものである。濡縁を縁側に改めたと認められる他は、大体、当初の規模を伝えているので、江戸時代豪族の生活の一端を窺うに足りる書院造りの標本である。

なお、天保6年に作成された屋鋪図は、江戸時代豪族邸宅の構えを示す一例として本書院と共に貴重な資料である。

建立以来、その後の修理は明らかでない。昭和30年度の屋根葺替修理の際に文政13年（1830）、明治2年、同17年、同41年の屋根葺棟札が発見された。明治末年に主屋を改築した際に現在の位置に移動し、一部を改造した。昭和24年4月13日重要美術品に認定され、その後昭和27年3月29日重要文化財に指定された。



内部詳細（上段の間）